



1) スティックで熱く激しいプレーが持ち味。しかし、普段は明るく、心優しい好青年。子どもからの人気も非常に高い
 2) 「男は背中で語る」。多くは語らず行動で示すタイプ。試合中、苦しくなったときには、この背番号が仲間にも勇気を与える（取材は7月に実施。今期からは13番）

小松大祐

佐高ラグビーで身に着けた「諦めない強さ」と「雑草魂」そのハートと才能には、元日本代表もほれ込んだほど。結果が全ての世界で競争を勝ち抜く力は「雑草魂」と「向上心」30歳を超えた今なお目標は「日本代表」



Daisuke Komatsu

1984年9月27日、迫町茂栗生まれ。東京都世田谷区在住。新田小、中学校時代は、野球で活躍。佐沼高校入学後、姉や中学時代の恩師などの勧めでラグビーの道へ。2003年立正大学へ進学。07年株式会社リコーに入社し、リコーブラックラムズへ入部。10年に社員からプロ選手へ転向。12年から昨年まで主将を務める。ポジションは高校、大学時代はウィングで、社会人では、センターやフルバックなどもこなすマルチプレーヤーとして活躍。今期からはセンターヘコンバート。妻、娘の3人家族。173cm、85kg。

ラグビー選手としては小柄な173センチ。だが、ビルドアップされた胸板や二の腕太ももは、鍛え抜かれた証。ラグーマン小松大祐が誕生したのは高1の時。中学時代の恩師と姉祥子さんの勧めで、6年間続けた野球から転向した。

「小さい頃から運動が好きでした。全身を使ってプレーするラグビーは性に合っています」と振り返る。類まれな身体能力と真摯な姿勢で1年からレギュラーに。持ち前の俊足と機敏性を買われてウィングを任せられた。プレーヤールールは、頭ではなく心と体で習得した。

当時の佐高ウィングティーンは、全国の上位常連で県内敵なしの仙台育英から1トライをもぎ取ることだった。3年の花園予選は、決勝で育英と対決。目標の1トライは奪ったが、優勝には届かなかった。「全力で勝負できました。決勝に進めたのは、先生の指導、OBや保護者の皆さんの支援があったから」と今でも感謝を忘れない。

高校卒業後は立正大へ。かつて、日本代表のスクラムハーフとして名をはせた堀越正巳監督に誘われた。小松の

才能にほれ込んだ堀越監督は、登米市や合宿先まで足を運んで熱心に勧誘した。当時、立正大は関東大学ラグビーリーグ戦2部に所属する発展途上チーム。一流の指導者と夢のあるチームに、小松自身も大きな魅力を感じた。

「負けてもいい上がる。諦めずに挑み続ける。これが原点」

小松は立正大に進んだ。大学では、高校時代には経験したことのない熾烈なポジション争いが待っていた。花園常連校はもとより全国から有望な選手が集まってくる。本場ニュージーランドなどの海外留学生も少なくない。そんな中、練習試合で出場が訪れた。ウィングとして出場した小松は、闘志あふれる積極果敢なプレーで存在感を示し、1年からレギュラーに抜てきされた。

「つかんだチャンスを絶対には生かす。その思いを胸に全力でプレーしました」

その後、小松はチームの主力として活躍。3年時には目標の1部昇格を果たした。その夏、ラグビーU-23日本代表候補合宿が立正大で行われた。候補選手に欠員が生じたため、小松は補充選手として

合宿に参加。全国のJapan候補と国内最高レベルの練習を繰り返した。卒業後は普通に就職しようと考えていた小松の脳裏に「日本代表」の4文字がよぎった。

「日の丸を背負って戦いたい」

日を追うごとに膨らむ夢、強くなる思い。

4年夏、声を掛けてくれたトップリーグのチームを断って、小松はリコーブラックラムズを選んだ。1953年に創部したリコーは日本選手権優勝2回を誇るなど、和製オールブラックスの異名を取る古豪。しかし、小松が入社した当時は、伸び悩んでいた。「上を目指すチームで頑張りたい」

その言葉は、立正大へ進んだ時と同じだった。さらに、「ユニホームが格好良かったので」と少年のように笑う。

2012-14シーズンは主将を務めた小松。現在も中心選手として活躍する。

リコー9年目の夏に、もう一度目標を聞いた。

「チームの優勝と日本代表です」

迷わず、ぶれず、諦めずに挑み続ける彼は、いつも頂点を目指して原点にいる。

リコーブラックラムズ

1953年創部。62年の歴史を持ち、社会人大会優勝3回、日本選手権優勝2回を誇る古豪。ジャパンラグビートップリーグには発足初年度の2003-04シーズンから参加。07-08シーズンに一度降格を経験しているが一年でトップリーグ復帰を果たす。過去には世界的名選手である元豪州代表スティーブン・ラーカムや現ニュージーランド代表マア・ノヌーらが在籍していた。今シーズンも豪州代表バーナード・フォーリー、サモア代表ティム・ナナイウィリアムズら強豪国代表選手が加入し、上位進出を狙う。7人制では、ジャパンセブンズ優勝2回を誇る。



クラブハウスには、日本選手権優勝トロフィーが燦然と輝いている

